



なごや「聖歌」だより7月号2013

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



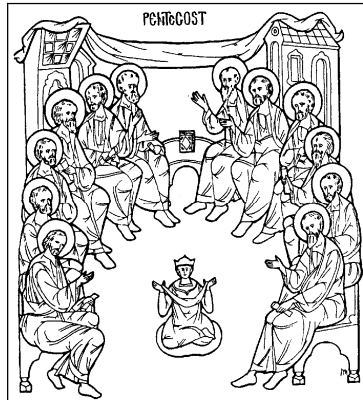
聖書と聖伝

正教会では聖書、教父の著作、公会議の記録、礼拝などを聖伝Holy Traditionと呼び、特に大切な伝統として守ってきました。これらは厳密に区分されるものではなく、礼拝の中で一体となって顕され、さまざまな習慣をともなって日常生活の中へ広がっています。

正教会でも、聖書は最も重要な伝統として尊重されますが、プロテスタント教会のように「唯一」とは考えず、ローマ・カトリック教会のように、「聖伝」と区別されるもう一つの信仰の源泉とは考えません。主から使徒へ、使徒から教会に渡されたひとつの「真理」は、その生命活動の中心である礼拝、信仰生活のいろいろな局面において多様な形で表現され、その総体を伝統と考えます。

「聖体礼儀」には、その日に指定される聖書の読み以外に旧約聖書から98カ所、新約から114カ所の引用があります（『聖書のメッセージ』クロンク）。しかし実は「引用」というのは話が逆で、実際に礼拝の中で語り伝えられたこと、行われていたことが記録されて新約聖書となったというのが本当です。聖書が書かれるはるか以前から、信徒たちは集まって祈り、主から命じられたとおりにパンを割き、感謝を行いました。主を直接知る弟子たちは自分の目や耳で見聞きしたことを語り、やがて話は書き留められ、福音書にまとめられました。生まれたばかりの教会は不安定で、多くのもめごとや困難に直面しました。パウロを始めとする使徒たちは遠くにある教会や弟子たちを案じ、手紙を送り、叱責し、助言を与え、励ました。同じような悩みを抱えた教会で手紙は回し読みされ、やがて使徒の書簡集となりました。私たちは二千年前の教会と同じように、聖体礼儀の集まりの場で福音書と使徒の書簡の読みに耳を傾けています。

聖書以外の聖伝も、聖書と同じ真実を状況に応じて、別の形で述べたものです。聖書もそうですが、古代の書物は一般論ではなく、常に具体的な



今月の予定

聖歌練習

名古屋 7/7・14代式後(結婚式)、聖体礼儀後、
半田17日(水)百年祭に向けて、主教祈禱の練習

名古屋指揮当番

21日マリア松島 28日エレナ廣石

状況の中で、特定の相手に対して語られたことばの記録です。たとえば、初代教父の護教論はローマの官憲に対して、迫害下の教会が自らを弁護したもので、異端への論駁は、間違った解釈が教会を脅かしていることを憂いた聖職者、修道士あるいは信徒が、異端を広めている人々（それは皇帝や高位聖職者のこともありましたが）に対して、命を賭して行った糾弾と警告で

す。全地公会議の記録は、全地から教会の代表（すなわち主教）が集まって話し合った重要問題の結論です。より正確な表現が必要とされた時には、ギリシア哲学の用語も用いられましたが、表わされているのは神から渡された同じ真理です。

イコンや聖歌も教会の現実の状況の変化の中で、編み出されてきました。街の大聖堂や教会で、修道院で、それぞれに工夫され、試され、分かち合われ、伝えられてきました。聖書の内容や教義も詩となり、歌われました。やがて一定の型ができあがり、内容を正しく守る枠の役割を果たすようになりました。正教会の礼拝は特定の権威者が机の前で沈思黙考して設計したり、会議を開いて決定し組織の上から与えたものではありません。現実の教会の中で作られ、教会の中で生み出され、伝えられ、守られてきました。個々の芸術家の自己表現を目的とする近代芸術とは異なります。

「伝統」とは生きているものです。博物館の化石のように過去の遺物を展示保存するものではありません。私たちのことば、声、姿を通じて「真理」を生きたものにします。教会で祈るとき、二千年の教会の人々とともに同じ真理を分かち合います。それを可能にするのは「在らざるところなき者、満たざるところなき者」あらゆる教会に自由自在に働く聖神の力です。どの時代のどこの教会にも多くの悩みや問題がありました。伝統の中には過去の教会からの忠告や助言や励ましがぎっしり詰まっています。私たちが祈り、願えば、それを生きたものとして用いることができます。それも聖神の働きです。

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

7. テクスチュア：その音楽がモノフォニー（単旋律）であっても、ホモフォニー（主旋律に伴奏のような和音をつけたもの）であっても、ポリフォニー（多声）であっても、音楽と詞のセッティングは、前へ前へと進む色糸の線を折り合わせることで、織り糸は一本（単声）であっても、多数本（多声）であっても、音楽という織物の水平方向の流れと、垂直的な輪郭の理解があります。感触は折り方で決まります。どんな味になるかはブレンドのわざです。織物（テクスチュア）の色合いは見たり聞いたりするだけでなく、「触れて感じる」ものです。

8. ひびき

聖歌隊のひびきイメージやパターンは、声の編成の結果というよりは、レーゲントが素材としての声をどう用るか、ひびきのテクスチュアをどう編成するかという織りのわざにかかっています。人間の声は美しい響きを作る無限の可能性のある楽器として

デリケートに作られています。「いい声がないから」というのは聖歌隊から変な音が聞こえてきたときの、言い訳の常套句ですが、そうではありません。正確に言うなら、レーゲントが自分の聖歌隊の各声部に何を指示すればよいか知らないのです。もっと言うなら、メンバーの声の扱い方を知らないのです。発声訓練以上の問題です。最高の声が揃っていたとしても、合唱を作るには編成されねばなりません。私たちが「奉神礼的なひびき」と呼ぶものは、声を祈りの楽器として扱うこと、祈りの発声法、礼拝としての音楽的ひびきを編成することです。レーゲントは自分の「聖歌隊」のひびきの質をイメージしてみなければなりません。自分の聖歌隊が実際にどう響いているか、耳を澄まして聞きます。声の質と発声のコンビネーションを高め、声のラインをもっと上手に調整し、何を歌えばよいかを賢く選択しなければなりません。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 「やってみよう」 八調で歌おう2

トロパリ 4 調の場合

トロパリ 4 調は「日本の亜使徒聖ニコライ」のメロディで、みなさんお馴染みです。4 調は①と②のパターンを繰り返し、最後に終結として③が加えられる構造になっています。その①②①②…+③というパターンに沿って、祈祷文の意味を損なわないようにを区切ります。

4 トロパリ



「ペトルパウエル祭」を例に挙げて解説します。

- ①使徒の上座にして／②全世界の教師なる者よ、
- ①世界に平安、／②我が霊に大なる憐を賜はんことを
- ③萬有の主宰に祈り給へ。

もちろん他の区切り方も可能です。

他の祭日を見てみましょう。多くの祭日トロパリが4調で歌われるように指示されています。

ほかの例を揚げてみましょう。「亜使徒キリルとメフォディイ祭」です。区切ってみてください。最後の部分の収まり方がちょっと難しいですね。

- 使徒と伴（ひと）しき者スロワエンの諸邦の教師として、
- 神智なるキリル及びメフォディイよ、万有の主宰に祈りて、
- スロワエンの諸族を正教と同心とに堅め、
- 世界を平安にし、我等の霊を救はんことを求め給へ。

<区切り方の例>

- ①使徒と伴しき者／②スロワエンの諸邦の教師として、
- ①神智なるキリル及びメフォディイよ、②萬有の主宰に祈りて、
- ①スロワエンの諸族を正教と同心とに堅め、②世界を平安にし、
- ③我等の霊を救はんことを求め給へ。

後半部分は、あるいは

- ①スロワエンの諸族を②正教と同心とに堅め、③世界を平安にし、
- 我等の霊を救はんことを求め給へ。

あるいは

- ①スロワエンの諸族を②正教と同心とに堅め、①世界を平安にし、
- ②我等の霊を救はんことを③求め給へ。

音付けについては次回。

八調のパターンについての詳細はhttp://www.orthodox-jp.com/liturgy/obihod/obihod_index.html にあります。

ホームページのご案内

- 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

- 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

- 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料